

受験番号				

座席番号			

(試験開始の合図の後に記入)

# 成城中学校入学試験問題(第三回)

## 国語

(配点一〇〇点)

令和五年二月五日 八時五〇分 — 九時四〇分

### 注意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子は全部で20ページあります。
- 3 解答には、必ず黒色えんぴつ(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 4 解答は、必ず解答用紙の指定の欄らんに記入しなさい。
- 5 問題冊子、解答用紙それぞれの指定の欄に、受験番号と座席番号を記入しなさい。
- 6 解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号などを記入してはいけません。また解答用紙の余白および裏面には、何も書いてはいけません。
- 7 文字数の指定のある問題は、句読点などの記号も一字に数えます。
- 8 問題冊子の余白は、下書きに使用してもかまいませんが、どのページも切り離はなしてはいけません。
- 9 問題冊子、解答用紙はどちらも持ち帰ってはいけません。試験終了後、必ず提出して下さい。



問題は次のページから始まります。

【一】 次の問いに答えなさい。

- 問1 次の——部について、漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。(ていねいにはつきりと書くこと)
- ① 一年の半ばもすぎた。      ② 子どものセーターをアむ。      ③ 最後の場面はアツカンである。
- ④ ケワしい山道。      ⑤ 農業にジュウジする人。

問2 次の文の——部「の」と同じ働きのものを、あとの文のア、オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

雨の降る日には家にいる。

母は料理を作るのが好きで、おまけに母の作る料理はおいしいので、友だちの来る日にはぜひ母の料理をふるまいたい。

問3 次の□に言葉を入れて、慣用表現を完成させなさい。

今や政界における彼の活躍は□を落とす勢いだ。

問4 次の□にそれぞれ漢字一字を入れて、ことわざを完成させなさい。

- ① 光陰□のごとし
- ② かわいい子には□をさせよ

問5 次の□にそれぞれ漢字一字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

- ① □ 耕 □ 読
- ② 空 □ 絶 □

問6 「しるぎを削る」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 激しく争う      イ 共に戦う      ウ 疲れ果てる      エ 犠牲を払う

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① ゴリラの会話の中でいちばん特徴的なのは、なんといっても「グググググ」という笑い声でしょう。笑い声を出す動物は、類人猿と人間しかいません。

② ぼくは、笑い声の先に、音楽や歌が誕生したのではないかと想像しています。声を出しあいながら、おたがいに気分を伝えあい、相手と同調していく。そういう笑い声を音楽や歌にまで昇華させたのが人間だったのでしよう。

③ 進化の過程をさかのぼると、ゴリラの笑い声は、他者との「同調」というコミュニケーションの、ひとつのAになっていく。ぼくはそう考えるようになりました。

④ 「笑い声」で他者と「同調」するコミュニケーションは、ゴリラの「遊び」にも一役買っています。

⑤ ゴリラは、日に何度も、しかもほかの動物とは比べ物にならないほど長く、遊び続けることができます。

⑥ 彼らが好んでよくやる遊びは「レスリング」と「追いかっこ」。それから、後ろから相手の腰に手を置いてついていく「ヘビダンス」や、つるにつかまってブラブラする「ターザンごっこ」、みんなより少し高いところに立ってドラミングする「お山の大将ごっこ」なども、定番の遊びです。

⑦ 彼らが遊んでいる最中に出す「グググググ」という笑い声は、「自分は今楽しいんだよ」ということを相手に伝える手段です。笑いがあることで、相手も「自分がやっていることは相手を傷つけたり、嫌な気分にはさせたりしていないんだ。遊びを続けてもいいんだな」とわかります。笑い声には、そういうメッセージの役目もあるのです。

⑧ 「遊び」というのは不思議なもので、遊ぶこと自体がBです。たとえば、みなさんが朝、通学路を歩くのは学校に通うためですよね。お母さんたちがお店へ行くのも、買い物をするためでしょう。ふつう、行動にはなんらかのBがあるわけです。

9 C、遊びは、単純に楽しみたいから、遊びたいから遊んでいるのです。

10 時間のむだづかいにも見える「遊び」を長く続けられるのは、遊びの内容をどんどん変えていけるからです。たとえば、なんとなくはじめた相撲すもうのようなとつきみあいがある、いつの間にか「おにごっこ」に変わって、だれかが空き缶あきかんを見つけて「缶けり」に変わる、というようなことは、幼いときに経験がある人も多いのではないのでしょうか。ゴリラの遊びも、追いかけて缶かんをしていて、捕つかまえたらそこでおしまいなのか、**D** 役割を交替こうたいして続けるのか、はたまた、ちがう遊びに変化していくのかというのは、遊んでいるゴリラたちの間で、相手の出方によって自分の出方を臨機応変に変えるというかたちで、展開していきます。

11 臨機応変に自分の出方を変えるには、相手が何をしようとしているのか、どんな気分なのかを察する必要があります。ようするに、共感する力を高めることが求められるのです。

12 だからこそ、力を加減することもできるのです。子どものゴリラに誘さそわれて、ブラックバックがレスリングに参加することがありますが、年が離はなれていけば、力の差は決定的です。相手の能力に応じて自分の力を加減したり、ときには、相手の力をいつもより出させるための工夫くわふをしたりしながら、彼らは上手に遊びます。

13 このように、相手に合わせ続けられる「体の能力」と「心の能力」と、なにより続けようとする「意志」があるからこそ、遊ぶことができます。人間やゴリラは、遊びという複雑な行為こうゐを、やすやすとやっつてのける体と心を進化させてきたのです。

14 この遊ぶ能力は、生まれつき備わっているものだと考えられています。ただし、その能力を引き出すには、小さいころに、同じような年ごろの子と遊ぶ経験が必要です。

15 今、日本の動物園では、ゴリラが繁殖はんしよくできないことが問題になっています。動物園で育ったゴリラは、子ども時代に同性、異性を問わず、遊ぶ機会が少なくなってしまう。それが原因で、交尾こうゐができなくなったゴリラも少なくありません。

16 「遊び」の中で、いろいろな相手と体を触ふれあううちに、同性同士はもちろん、自分とはちがう体を持つ異性とも共感できるようになります。この共感がないと、交尾さえできなくなってしまうのですね。

17 みなさんは、幼い子どもが、「お母さん、見て見て！ 虫がいる！」などと、母親に、一所懸命いっしょけんめいに呼びかけている姿を見たことがありますか？ 子どもはなぜ、自分が見たものを母親にもいっしょに見てほしいと思うのでしょうか。

18 小さな子どもに限ったことではありません。大人だって、雨上がりの空にきれいな虹にじがかかっていたり、凍こてつくような冬の夜空にぼっかり浮うかぶ満月を見つけたりしたら、好きな人といっしょに見たい、その美しさや、それを見ている時間を共有したいと思うはずです。

19 人間は、どうして、こんなふうに関感したがる生き物なのでしょう？

20 ぼくたちの食事の仕方に、この疑問を解く答えのひとつがあると考えられています。

21 食べ物えものは争いのもとになるので、動物はふつう別々に食事をとります。肉食動物やワシタカ類は、自分だけでは動かせない大きな獲物を仲間といっしょに食べますが、けっして仲よく食べているわけではありません。食事中に争いは絶えないし、ひとりじめにしようとするものもいます。人間に近いサルや類人猿は、果実や葉といった小さな食物が主食なので、仲間と分けあう必要も、いっしょに食べる必要もないのです。

22 しかし、人間だけは、狩かってきた動物やとってきた木の实などを、みんなで分けあって顔をつきあわせて食事をします。あえて食事をともにするともことで、家族や仲間とのきずなを確認かくにんし、共感をより深めあつてきたのです。

23 ところが、人間が言葉ことばを獲得したときから、共感は薄うすまる運命うぐいになりました。

24 ゴリラやチンパンジーの集団は、だいたい十〜十五頭で構成されていますが、人間も言葉を使わなくても気持ちを通じあえる仲間、たがいに信頼感しんらいかんを持ちあえる集団しんりゆう（共鳴集団といえます）の規模は、十〜十五人程度といわれています。サッカーチームは十一人、ラグビーチームは十五人ですが、理ことに適あった人数というわけです。

25 さらに、顔かほと名前なまえが一致いっちするのはせいぜい百五十人までだといわれています。これは、動物を狩かったり、木の实や果実をとったりして暮くらす、狩獵しゅりやう採集民さいしゅうじんの共同体の人数と、だいたい同じです。

26 ところが、コミュニケーションの幅はばを広げる言葉という道具を手に入れた人間は、信頼関係を築ける十五人という規模の集団をこえ、百人、千人単位の知り合いを作れるようになりました。それが、人間が長いこと育んできた、共感する力を薄めてしまうことと引きかえだつたという側面は、見過ごせません。自分にとっての相手、相手にとっての自分は、十五人のうちのひとりではなく、百人のうちのひとり、千人のうちひとりになってしまったのです。分母が大きくなればなるほど、個々の関わりはどうしても希薄きはくになっていきます。

27 また、遠くはなれて電話やメールでつながっている関係では、相手と同じものを見る、同じ音を聞く、同じにおいをかぐ、同じものを食べ

る、手をつないでたがいに触れあう、そんな体を通して生まれる深い共感が失われてしまうのは、当然といえば当然のことなのです。

〔28〕 ゴリラと人間は、ほかの動物よりも「遊び」や「笑い」を進化させてきました。

〔29〕 同じ年ごろの子どもたちとたつぷり遊ぶ経験を持たない動物園のゴリラが、交尾できなくなっている事実を見てもわかるとおり、遊びや笑いを通じた、他者との同調や共感がなくなっていくと、ゴリラも人間も、生きることの土台がゆらいでしまうのかもしれない。

（山極寿一『15歳の寺小屋 ゴリラは語る』（講談社）による）

問1 ——— ① 「ぼくは、笑い声の先に、音楽や歌が誕生したのではないかと想像しています」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、他者と気持ちを共有するという点では、音楽や歌も笑い声と同様の役割を担うものであると考えているから。

イ 筆者は、人間社会では、笑い声よりも音楽や歌の方がコミュニケーションの手段として頻繁に用いられていると考えているから。

ウ 筆者は、本来笑い声は、他者と喜びを分かちあうという点で音楽や歌以上の力を発揮するものであると考えているから。

エ 筆者は、類人猿の笑い声とは異なり、人間の笑い声が音楽や歌という独自の進化の過程をたどることになったと考えているから。

問2 ——— A・B に当てはまる言葉を次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 経験      イ 原型      ウ 事例      エ 目的      オ 模範

問3 ——— ② 「ゴリラは、日に何度も、しかもほかの動物とは比べ物にならないほど長く、遊び続けることができるのです」とあるが、これについて以下の問いに答えなさい。

(1) なぜゴリラはほかの動物と違って日に何度も長く遊び続けられるのか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ゴリラは人間と同じように定番の遊びを多く知っているから。

イ ゴリラはほかの動物と異なり単純に楽しみたいだけでやっているから。

ウ ゴリラの笑い声は多くのメッセージを伝えることができるから。

エ ゴリラは相手の気分を察して遊びの内容を変えられるから。



(2) ゴリラがほかの動物と違って日に何度も長く遊び続けられるのは、ゴリラに何が備わっているからか。これよりあとの本文中から四十字以上四十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字をそれぞれ答えなさい。

問4  C  D に当てはまる言葉を次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア したがって                   イ すなわち                   ウ それとも                   エ ところが                   オ なぜなら

問5 ——— ③ 「人間が言葉を獲得したときから、共感<sup>きかん</sup>は薄まる運命にありました」とあるが、「共感<sup>きかん</sup>は薄まる」とはどういうことか。それを説明した次の文の  に当てはまる言葉を六十字以内で答えなさい。ただし、「反面」という言葉を用いること。

言葉の獲得によって、 ということ。

問6 本文の内容に合うものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 動物園のゴリラは、同世代の仲間と遊ぶ機会に恵まれておらず、本来獲得されるはずの共感する力が身につかないことが問題となっている。

イ 幼い子どもにとって自分の経験を共有する相手は身近な大人に限られるが、成長するにつれてその対象が広がっていくのは、不思議なことである。

ウ 「遊び」の中で相手の気持ちを考える機会を持たないために争いが絶えないという点で、肉食動物やワシタカ類はゴリラや人間と同様の問題を抱えている。

エ サッカーチームやラグビーチームの人数は、人間が言葉を使わなくてもたがいに信頼感を持ちあえる集団規模とほぼ一致するという点で、理に適っている。

オ ゴリラと人間は共通する点も多いが、人間は言葉を使用することで「遊び」とどまらないより高度な関係を他者と築いてきたという点で、ゴリラにまさっている。

問7 本文を内容から三つに分けるとすると、どのように区切ることができるか。区切り方として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア	1	3	4	14	15	29
イ	1	3	4	16	17	29
ウ	1	6	7	14	15	29
エ	1	6	7	16	17	29

問8 次の【資料】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【資料】

新型コロナウイルスによるパンデミックの間、デジタルデバイスは外の世界とつながるためのライフラインとしてかけがえのない存在だった。仕事のミーティングやヨガ教室、アフターワークや医師の診察<sup>しんさつ</sup>までがオンラインで行われるようになり、現実世界よりもバーチャルな世界にける時間が長くなった。その後、世界中から多くの人がストレスや孤独<sup>こどく</sup>を感じているという報告が上がってくるまで長くはかからなかった。様々な感染症<sup>かんせんじょう</sup>が人間にとって脅威<sup>きょうゐ</sup>だったことを考えると、パンデミックに関する情報を次々と浴びせかけられることが強いストレスなのは当然だ。しかし、孤独感が増したというのは何によるものなのだろうか。今のようにインターネットが普及<sup>かきつう</sup>した社会では、デジタルでよければ会うことくらいいくらでも可能なのに。なぜ画面<sup>えん</sup>越しでは私たちの社交欲求は満たされないのだろうか。

〈アンデシュ・ハンセン『ストレス脳』(新潮新書)による〉

問 【資料】には「なぜ画面越しでは私たちの社交欲求は満たされないのだろうか」とあるが、その理由を本文にもとづいて説明した次の文の [ ] に当てはまる言葉を、26～29の本文中から十字以上十五字以内で抜き出して答えなさい。

人の社交欲求は、 [ ] を通じて満たされるものだから。

## 【三】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

主人公の葉山珠美（「たまちゃん」）は過疎化、高齢化が進む生まれ故郷で問題となっている「買い物弱者」の老人たちを救うために、通っていた大学を辞めて移動販売の「おつかい便」を起業することを決めた。

翌朝、布団のなかで目覚めると頭の芯が少し痛んだ。

軽い二日酔いだ。

カーテン越しに朝日が透けて、部屋はうつすらと明るい。

布団からのそのそと起き上がり、渴いた喉を水道の水でうるおした。冬の冷たい水は、食道を伝い、胃に落ちていくのがよくわかる。コップ半分ほど飲んだところで、思わず「ふう」と声に出してしまふ。

部屋がうすら寒いのでエアコンのスイッチを入れた。

壁際に積み上がった段ボール箱を見たら、都会に憧れて意気揚々とこの部屋に入居した十八歳の春のくすぐったいような空気を思い出した。あの頃のわたしは無知で無垢で無邪気だった。大学生活に漠然とした希望を抱いていたのだ。でも、実際にキャンパスに通つてみると、わたしが思い描いていたものとはずいぶんと違っていた。授業はあまり面白くないし、これといってやりたいこと、学びたいことも見つからなかった。気の合う友人たちと無為に戯れたり、バイト先で小さな恋愛をしたりするのは愉しかったけれど、それ以外はもう、ただゆるい日々を積み重ねていくだけで、自分の人生を「ちゃんと生きている」気がしなかったのだ。

わたしは、地に足をつけて自分らしく生きている両親の背中を見ながら育ったことと、母の教えの影響もあって、たった一度の人生に与えられた時間を無駄に使うことがとても怖く感じられてしまうタイプなのだと思う。

② 命ってね、時間のことなんだよ。

小学六年生の頃に、母はわたしにそう教えてくれた。

つまり、この世に「おぎゃあ」と生まれ落ちた瞬間から、わたしたちはすでに「余命」を生きていて、あの世に逝く瞬間まで「命」という名の「持ち時間」をすり減らし続けているというのだ。

命||自分の持ち時間

そのシンプルな説明は、子どものわたしにも、とてもわかりやすいものだった。

一分、一秒、いまこの瞬間も、わたしは貴重な命をすり減らしながら生きていて、着実に「死」へと近づいている。そう思うと、自分らしく心のままに生きていない時間がもったいなくて仕方なく感じてしまうのだ。そして、そのもったいがないという気持ちのなかに積み重なってどんどん重くなってくると、それはいつしか「不安」に変わり、やがては「恐怖」に似た感情になってくる。わたしが「おつかい便」を思いついたのは、上っ面を愉しんでいるだけの大学生活で、命の無駄使いをしているのではないかと不安を感じていたちょうどそのときのこと、だからこそ、わたしの決断は早かったのだ。

大学の事務所に退学届けを出したとき、わたしの胸裏は、夢へのときめきでいっぱいだったし、**A**ですらあった。それなのに、昨夜は、大学生を続けている友人たちがきらきら輝いて見えてしまうなんて……。

**a** 積み上がった段ボール箱に向かって、**b** 空っぽのため息をついた。

まだ朝食を摂る気にはなれないから、再び布団のぬくもりのなかにもぐり込んだ。そのままぼんやりと白い天井を見詰めていたら、昨夜の「プチお別れ会」の記憶が少しずつ甦ってきた。

ワイングラス片手に、愉しさと淋しさのあいだでふらふら揺れていたわたしは、たつぷりのアルコールで饒舌になって、これから自分をはじめようとしている「おつかい便」について、彼らに熱弁していた。女子たちは口をそろえて「うん、うん」「わかる、わかる」「それ、すごいと思う」なんて、いい感じに調子を合わせてくれていたけれど、しかし、男子たちは違った。現実的な台詞をまっすぐにぶつけてきたのだ。「うーん、わかるけど、ちょっとリスクじゃねえ?」「将来性はあんの?」「資金金はどうするわけ?」「過疎地で起業するなんて、俺だったら怖くてできねえけどな」などと、まさに酔っぱらいらしい **B** をわたしにぶつけてきたのだ。本当は、こういう現実を言ってくれる方がやさしいのかも知れないけど……。

そして、わたしは、とにかく必死になって彼らのネガティブな説を論破しようとして試みたのだった。でも、それもあまり上手くないかなかった気がする。わたしの内側からは、ただ熱がほとばしるばかりで、理路整然としたクールな言葉があまり出てこなかったのだ。こんなにも日夜「おつかい便」のことばかり考え続けてきたというのに、自分でも不思議になるけれど。

そして、正直いうと、わたしは、彼らの現実的な言葉と口調におののいていた気がする。自分の考えと行動が、あまりにも浅はかで軽卒なも

のだったのではないかという不安に押しつぶされそうになっていたのだ。だから、わたしはアルコールの力を借りながらも必死に抵抗し、言葉を返し続け、彼らに「おつかい便」の意義と可能性を理解してもらおうとしていた——と、いうのは、じつは表面上のことで、本当の本当は、むしろ、わたし自身を自分の言葉でちゃんと納得させたがために、ひたすら熱弁をふるっていたのだと思う。

エアコンで部屋があたたまった頃、わたしは布団から出た。

窓のカーテンをさつと開けると、部屋のなかが新鮮なレモン色の光で満たされた。昨夜のみぞれはいつの間にかあがっていて、空には透明感のある水色が広がっている。

顔を洗い、歯を磨き、ガラス天板の小さなテーブルで、昨夜コンビニで買っておいだ野菜ジュースとサンドイッチを口にした。

食後、何気なくテレビをつけてみたけれど、これといって観たい番組が見つからなかった。だからわたしは床にぺたりと座り、背中を壁にあずけながら、読みかけの本を開いた。

本のタイトルは『死を輝かせる生き方』。

今朝の青空みたいな清々しいブルーのカバーが巻かれたその本には、幸福な人生を送るためのコツがあれこれ書かれていた。そもそも、わたしは読書といえは小説とエッセイにしか興味がなかったのだけれど、起業を志したのをきっかけに、様々なビジネス書や自己啓発本を読むようになっていたのだ。

その本のページを開いて十五分ほど経ったとき、ふと心に引つ掛かる一節と出会った。わたしは、その一文を読み返した。

④《人生には、みんなが通ったあとにできる轍はあっても、レールはない。だから、あなたは自分の心を羅針盤にして、あなただけの道を歩いていけばいい。そして、それこそが唯一、後悔をしないで死ぬための方法なのだ》

わたしは、この文章を三度、四度と読み返した。

そして、ホッとため息をついた。

なんだか、母が天国からメッセージをくれたような気がしたからだ。

と、ちょうどそのとき携帯が鳴った。メールだ。

わたしはテーブルの上に置いてあった携帯を手にした。差出人は、静子ばあちゃんだった。メールのタイトルには《今朝のしづく》とある。本文を開いてみると、《たまちゃん、今日はとても寒いですね。インフルエンザが流行はやっているそうです。くれぐれも気をつけてね》と書かれていた。そして、写真がひとつ添付てんぷされていた。冬枯がれた庭の梅の枝先についた雨滴うたぎが、朝日を浴びてきらめいている写真だ。

天国の母からメッセージをもらえた、と思っていたら、続けて静子ばあちゃんからこんな美しい写メが届くなんて。なんだろう、このタイミング。

たまらなくなつて、わたしは静子ばあちゃんをコールした。

「もしもし」

と、静子ばあちゃんは、すぐに出てくれた。もしもし、という四文字の言葉だけで、静子ばあちゃんが笑顔えがおになっているのがわかった。

「珠美だよ。おはよう」

「おはようさん。そっちも寒いのかい？」

「うん、多分ね。でも、いま部屋のなかだから、よくわかんないけど」

「こっちは昨日、みぞれが降ったんだよ」

「あ、こっちも降った。いまはいい天気だけど」

「こっちも、今日ひとつともいい天気」

静子ばあちゃんは、青空を見上げているかのようなしやべり方をする。

「写メありがとね。すごくいい写真だね」

「あら、よかった」

静子ばあちゃんは、うふふ、と笑った。

それからわたしたちは、写真の梅の枝に花が咲くのはもうすぐだとか、その梅の実で作る梅干しが酸すっぱくて美味おいしいとか、先日の龍りゅうの形をした雲のこととか、たいして中身の無い会話を愉たのしんだ。そして、何かの拍子ひょうしに、ふと、ふたりの間に沈黙ちんもくが降りたとき、静子ばあちゃん

は、「それで——」と、おっとりした口調で言った。

「え？」

「たまちゃん、今日はどうしたんだい？」

静子ばあちゃんは、幼い孫の頭を撫でるときのような、とても恵み深い声を出した。

「どうしたのって……」

急な展開に、わたしは言葉を失くしてしまふ。

「たまちゃんが用もないのに電話をしてくるなんて珍しいから。何かあったのかなって思ったんだけど何かって——。」

わたしの脳裏に、友人たちに熱弁をふるう昨夜の自分の声が甦ってきた。淋しさと、不安と、必死さの裏返しともいえるその声は、穏やかでやさしい静子ばあちゃんの声とは対極にある気がして、胸のなかが急にじんじんと熱くなってしまうた。

もしかして、静子ばあちゃんは、すべてお見通しなのだろうか？

そういえば、いまは亡き母も、幼いわたしにとつては何でも見透かされてしまう存在だった気がする。

「あつたと言えば、あつたかな」わたしは、せめて、いまこの瞬間の声色だけは明るくしようと決めながら、口を開いた。「じつは昨日、友だちにわたしの将来の話をしたんだけど——、そうしたら、あんまり期待したような反応をもらえなかったんだよね。それがちよつと残念だったけど……。何かあつたとしたら、まあ、それくらいかな」

静子ばあちゃんは、「そう……」と言ったきり、少しのあいだ何も言わずにいた。わたしも、なんとなく口を閉じたままだった。やわらかな沈黙のなか、わたしはいつた静子ばあちゃんに何を期待しているのだろう、と自分に問いかけていた。

「ねえ、たまちゃん」

その沈黙を、静子ばあちゃんがそつと破った。

「ん？」

「死んだおじいちゃんがね、よく絵美に言っていたことがあるの」

「え……」

わたしのおじいちゃんが、お母さんに？

「人に期待する前に、まずは自分に期待すること。で、その期待に応えられるよう、自分なりに頑張がんばってみること。人にするのは期待じゃなくて、感謝だけでいいんだよ——って」

「……………」

なるほど、と思いながら、わたしは壁f際に積み上がった段ボール箱の山を見た。その山に朝日が当たっていて、なんだかちょっと神秘的な感じがした。

まずは自分に期待すること、か。

「ねえ、おばあちゃん」

「ん？」

「おじいちゃんって、篤農家とくのうかだったんでしょ？」

篤農家とは、とても研究熱心でまじめな農業者のことだと静子ばあちゃんに教えてもらったことがある。

「そうだねえ。とにかく土をいじっているのが大好きな人だったよ。たまちゃん、おじいちゃんの顔、覚えてる？」

「うん、少しか。日焼けしてて、よく麦わら帽子ぼうしをかぶってたよね」

「ああ、そうだねえ」

静子ばあちゃんは、在りし日を追懐ついかいするような声を出した。

おじいちゃんは、わたしが物心ついてすぐに逝あってしまったから、記憶おぼえも曖昧あいまいだけれど、母のことも、わたしのことも、それはそれは可愛かわいがつてくれたらしい。

「わたしね、いま読んでる本があつて、ちよつといい言葉を見つけたんだ」

そう言つてわたしは、傍かたわらの『死を輝かせる生き方』を手にした。そして、天国の母からプレゼントされたような一文をゆつくり丁寧ていねいに読み上げた。

「人生には、みんなが通つたあとにできる轍わだかまはあつても、レールはない。だから、あなたは自分の心を羅針盤ろしんぱんにして、あなただけの道を歩いて



いけばいい。そして、それこそが唯一、後悔をしないで死ぬための方法なのだ——。どう？　なんか、いいでしょ？」

「うん。いい言葉だねえ」

「だよね」

「おじいちゃんが絵美に言ってた言葉と、よく似てるよ」

「うん。結局、同じことを言ってるよね」

わたしは、わたし自身に期待して、心のままに、わたしだけの道を歩いていく。そして、人にはただ感謝をすればいい。そうすれば、死ぬ時に後悔をせずに済む。

それでいいんだ。きつと。

「やっぱ、電話して、よかった」

そう言つて、わたしは軽くため息をついた。

「え？」

「おばあちゃん、サンキュー」

静子ばあちゃんは「あらあら、どういふことかしら」と言つて小さく笑うと、「わたしも、朝からたまちゃんの声が聞けて元気をもらえたよ」と言つてくれた。

その穏やかな声を聞きながら、わたしは窓の外の清々しい青空を見上げた。

〈森沢明夫『かたつむりがやってくる　たまちゃんのおつかい便』（実業之日本社文庫）による〉

注 「軽卒」……「軽率」に同じ。原文はこの表記。

問1 ——— ① 「自分の人生を『ちゃんと生きている』気がしなかったのだ」とあるが、「わたし」にとって「ちゃんと生きている」とはどう

することか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無知で無垢で無邪気な自分が早く大人になって、自立した生活を送ること。
- イ 一度しかない貴重な人生なのだから、明確な目的をもって生きること。
- ウ あえて刺激的なことに挑戦（ちょうせん）してみることで、有意義な人生を生きること。
- エ 生きがいの見つかからない都会を離れ、希望にあふれている田舎（いなか）に戻ることに。

問2 ——— ② 「命ってね、時間のことなんだよ——」とあるが、母はどのようなことを伝えようとしたと考えられるのか。その説明として

最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生まれる時と場所を選ぶことはできないが、人生とは自分の時間を有効に利用することである。
- イ 思い通りになる時間は限られており、人生とは残っている時間に追われて生きることである。
- ウ 人に与えられた時間は生まれた時から決まっており、人生とはその時間を使い切ることである。
- エ 誰かのために時間をかけることで人は成長するのであり、人生とは人のために時間を費やすことである。

問3 ———  A ・  B に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア A 爽快（そうかい）な気分                      B 無慈悲（むじひ）な持論
- イ A 悟り（さと）の境地                      B 的外（ぐわい）れな主張
- ウ A 心休まる思い                      B 建設的な助言
- エ A 不安な気持ち                      B 無責任な意見

問4 ——— ③ 「わたしは、とにかく必死になって彼らのネガティブな説を論破しようとしたのだ」とあるが、それはなぜか。その理

由を説明した次の文の  X ・  Y に当てはまる言葉を、 X は二十字以上三十字以内、 Y は二十字以内でそれぞれ答えなさい。

X 、彼らを論破する「こと」を通して、 Y から。

問5 —— ④ 「人生には、みんなが通ったあとにできる轍はあっても、レールはない」とあるが、これはどういうことか。その説明として

最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人生には偶然の出会いが将来に影響を与えることがあるので、人からの助言も聞き入れて、自分の生き方を決めるべきだということ。
- イ 人生とは周囲の考えに繰り返し合わせていくことで形づくられていくものであり、あらかじめ決まっているものではないということ。
- ウ 多くの人は他人の経験を参考にして生きる道を決めていくが、少しでも他人と違う道を選ぶうとする人も存在するのだということ。
- エ 人生には正しい道がありそうに思えるが、必ずしもそのようなものではなくて、人と違った生き方を選ぶことは可能であるということ。

問6 —— ⑤ 「静子ばあちゃんは、『それで——』と、おっとりした口調で言った」とあるが、ここでの静子ばあちゃんの説明として最も適

当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 孫の様子からなにかしら悩みがあると感じ、どうにかそれを聞き出そうとしている。
- イ 大人になってもいまだに幼さが残る孫に、精一杯優しい態度で接しようとしている。
- ウ なかなか用件を切り出さない孫を氣遣って、なるべく話しやすい雰囲気を作ってあげようとしている。
- エ いつもとは違う様子で電話をかけてきた孫に対して、どのように声をかけてよいか戸惑っている。

問7 —— ⑥ 「胸のなかが急にじんじんと熱くなってしまった」とあるが、このときの「わたし」の気持ちの説明として適当なものを次の

ア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 友人だけではなく、静子ばあちゃんまでも自分のことを理解してくれないのではないかと思いはじめている。
- イ 自分の不安な思いがすべて静子ばあちゃんに筒抜けであるように感じ、気恥ずかしさが込みあげている。
- ウ あくまでマイペースな姿勢を崩さない静子ばあちゃんに対するいらだちをこらえようとしている。
- エ 自分の悩みを打ち明けると、静子ばあちゃんが余計に心配してしまうのではないかという不安が生じている。
- オ 静子ばあちゃんのようにおおらかな態度で人と接することのできない自分が情けなくなっている。

## 問8

⑦「わたしはいつか静子ばあちゃんに何を期待しているのだろう」とあるが、「わたし」は何を期待していると考えられるのか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 直接は言えないけれど自分が落ち込んでいると察してもらい、自分の進む道を昔のように示してもらおうこと。

イ 自分で決断して新しい生活を始めてみたものの、自分はまだ幼くて助けが必要だと気づいてもらうこと。

ウ 自分の思いで行動したものの、不安になってどうすればよいかわからなくなった自分を肯定してもらおうこと。

エ 友だちは上っ面を愉しむだけの大学生活を送っているが、自分は誠実に生きているのだとわかってもらうこと。

## 問9

……a～hの表現と内容に関する説明として、誤っているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア a「積み上がった段ボール箱」は、山積した課題の存在を「わたし」に想起させるが、f「壁際に積み上がった段ボール箱の山」は、前向きに乗りこえていくべき課題として受けとめられつつあることを表している。

イ b「空っぽのため息をついた」の「ため息」は、「わたし」の不安な気持ちを物語っているが、g「そう言って、私は軽いため息をついた」の「ため息」は、静子ばあちゃんと話ができて「わたし」の不安がやわらいだことを表している。

ウ c「青空を見上げているかのようなしやべり方」は、静子ばあちゃんのおおらかな雰囲気、h「わたしは窓の外の清々しい青空を見上げた」は、「わたし」が前向きになった心情を表していると読み取れる。

エ d「どうしたのって……」の「……」は、「わたし」が言いたいことを抑えて飲み込んでいる様子を、e「そう……」の「……」は、静子ばあちゃんが「わたし」に対するじれったさを紛らわそうとしている様子を表していると読み取れる。

※文字はていねいにはっきりと書くこと

【一】

問1	① 半ば	ば	② ア	アツカン	④ ケワしい	しい	⑤ ジュウジ
----	------	---	-----	------	--------	----	--------

問2


問3

--

問4

①
②

問5

①
耕
読
②
空
絶

問6

--

【二】

問1

--

問2

A
B

問3

(1)
(2)
最初
最後

問4

C
D

問5

				言葉の獲得によって、 とくしくと。

問6

--

問7

--

問8


【三】

問1

--

問2

--

問3

--

問4

Y	X

問5

--

問6

--

問7

--

問8

--

問9

--


/100

受験番号

--	--	--	--	--

座席番号

--	--	--	--	--

※文字はていねいにはつきりと書くこと

【一】

問1	① なか	ば	② 編	む	③ 圧巻	④ 陰	しい	⑤ 従事
	半	ば	ア	む	ア ン カ ン	ケ ワ シ イ		ジ ュ ウ ジ

②点×5

問2	イ	工	飛ぶ鳥
	完答	②点	②点
問3	① 矢	旅	
	①点×2	①点×2	

問5	① 晴耕雨読	空前絶後
	②点	①点×2
問6	ア	
	②点	

【二】

問1	ア	イ	エ
	④点	②点×2	②点×2
問2	A	B	工
	④点	④点	④点
問3	(1) 工	(2) 相手	に
	④点	④点	④点
問4	C	D	ウ
	完答	④点	④点
問5	最後	意志	」
	④点	④点	④点

言葉の獲得によって、

問5	しまった	こえてしま	れた反面、	コミュニケーションの幅を	広げら
	た	い、	その幅が	信頼関係	を築ける
		個々の	関わりが	希薄にな	って
		の関わり	が希薄に	な	って
		の関わり	が希薄に	な	って
		の関わり	が希薄に	な	って

コミュニケーションの幅を  
広げられる深い共感  
ということ。  
⑥点

問6	ア	エ
	③点×2	④点
問7	イ	
	④点	

問8	体を通して生まれる深い共感
	④点

【三】

問1	イ
	④点
問2	ウ
	④点
問3	ア
	④点

問4	Y	X
	自分	自分の
	は	ない
	はない	か
	を	自分の
	を	言葉で
	納得	させた
	か	った

問5	工
	④点
問6	ウ
	④点
問7	イ
	④点
	オ
	②点×2
問8	ウ
	④点
問9	工
	④点

⑥点

/100
------

受験番号			

座席番号			